

協働性・同僚性を活用した

参画型校内研修による授業力の向上

小 森 康 貴 (学校経営コース)

1 問題の所在

平成 29 年度に研究主任となり、校内研修を計画・実施した。その研修成果を日々の授業に生かしているか調査したところ、公開授業をした教員は公開授業で得た成果を日々の授業に生かしているが、公開授業を参観しただけでは生かしていないことが明らかになった。

新潟市では、一人1公開授業を行っている小学校が多い。しかし、そのために多忙になったり、一つ一つの公開授業に対する取組がおろそかになったりしているのが現状である。

そこで、公開授業の成果を効率よく教員の授業力向上に結び付けることができるような校内研修の在り方を探ることとした。

2 参画型校内研修

公開授業を行っていない教員が、校内研修の成果を日々の授業に結び付けるためには、当事者意識をもたせることが重要である。公開授業者が、校内研修で得られた成果を日々の授業に生かしているのは、自分が主体となって研修に参画していたからである。

そこで、平成 30 年度研究(本研究1年目)では、公開授業を行わない教員にも当事者意識をもって研修に参加させるために、学年全員で授業を構想し、学年全員で授業を実施し、学年全員で授業を振り返る授業研究方式を採った。特に重要なことは、学年全員で同じ授業をすることである。公開授業者以外も公開授業と同じ授業を自学級で行うことになれば授業構想段階から当事者意識をもって参画せざるを得ないし、公開授業者と同じ土台で授業を振り返ることができるからである。このように、当事者意識をもたせ、学年の協働性・同僚性を活用して、公開授業を行った教員もそうではない教員も授業力を高めることができるようにすることを目指した。

具体的には、平成 29 年度に行っていた J G (授業力[J])と学級力[G]についての情報交換会、公開授業とその協議会、プレゼン研修(各自の実践の発表会)の内容を変更し、それら3つを連動させ、各学年の教員を中心としたチームで協働して行う。※図1参照。



図1 参画型校内研修の概要

【JG構想会】

平成 29 年度に行っていた J G (授業力[J])と学級力[G]についての情報交換会)に指導案検討会の役割を取り入れた授業構想会である。

学年団構成員を中心に公開授業に向けて一緒に授業づくりをする。その際、これまで行われてきた J G (授業力[J])と学級力[G]についての情報交換会)のよさも残し、学級力の視点も取り入れて授業を構想する。具体的には、公開授業者がたたき台として授業構想シートを用意し、それを基に全員で学級力・授業力の両面からアイデアを出し合う。公開授業者が一人で悩むのではなく、全員で授業を構想するため、公開授業者の負担は軽減する。また、学年の学級担任全員が同じ指導案で授業をするため、自分も授業をするという立場で参加することになる。これにより当事者意識が高まる。

【公開授業】

J G 構想会で授業構想が決まると公開授業者が代表で指導案を書く。指導案が完成すると、その指導案で学年全員が同じ授業をする。

公開授業をよりよいものにするために、同じ学年のメンバーが事前に授業をして指導案を修正することは、多くの学校で行われる。しかし、これでは、公開授業者以外が当事者意識をもって授業を行うことができない。そこで、学年全員に当事

者意識をもたせるために指導案の修正は一切行わない。

【プレゼン研修】

平成 29 年度には、授業者以外が自分の実践を発表する会として行っていた。それを各学年の公開授業の成果を発表する場として位置付ける。プレゼン研修というゴールを設定することで、各学年が授業について振り返る必要性ができる。さらに、各学年の成果を学校全体で共有する役割も担っている。

3 参画型校内研修の実践

(1) JG構想会

6 学年の JG 構想会では、最初に学級の実態を話すことや公開授業をする学級と同じような実態が他の学級でも見られるかどうか確認することが授業構想で大切であるということが見えてきた。また、2 学年の JG 構想会ではその点を考慮し「自分が授業をしたら」という視点で意見を出し合った。すると、子ども同士の話し合いのさせ方や発問などについてたくさんの意見が出された。

このように、実際に自分が授業をすることを想定し始めると話し合いが活発になることが分かった。参加者は公開授業者が構想した授業を考えながら、同時に自分の授業も想定している。それが、当事者意識をもった話し合いにつながっている。

経験年数の少ない若手教員に対する支援の手立ての必要性も感じた。1 学年の公開授業者は、JG 構想会では授業構想を理解しているように見えたが、その後の修正に困難を感じていた。疑問点を誰にも質問できず、課題が解消されない状態で授業構想を行っていたのである。このような教員に対しては、授業づくりの過程を通して相談ができるような担当者を新たにつくる必要がある。

(2) 公開授業

自分で指導案を書かなくても当事者意識をもって授業をすることができるということが、2 学年の公開授業以外の授業参観時に見られた。それは、一緒に授業を参観していたベテラン教員 A の姿である。A 教諭は、次の時間に自分が同じ指導案で授業をすることになっていた。そのため、次に自分が授業をすることを想定しながら授業を見て、授業者の動きや言動を細かくメモしていた。A 教諭の授業後に感想を聞いたところ、「人前で授業をすることがかなり久しぶりでとても緊張した」と言っていた。A 教諭の姿から、当事者意識をもって参観したり授業をしたりしていたことがうかがえた。

しかし、問題も浮き彫りになった。学年全員が同じ指導案で授業をしないといけないため、公開授業後の協議会で代案が示されたり、明らかに指導案に問題があったりしても、同じ指導案で授業を実施しなくてはならなかった。学年全員が、全く修正しないで同じ指導案で授業をするには大きな問題があることが判明した。

(3) プレゼン研修

各学年 5 分で発表した。発表は以下の内容で行うことにした。

① 授業内容の紹介（1 分程度）

② 授業を通しての成果（3～4 分程度）

1 学年から順番に実践の成果を発表した。授業の成果としては、「理由に焦点を当てて話し合うと考えが深まる」や「文章を見直す際に視点を明らかにするとよい」などが発表された。

プレゼン研修がなければ、自分の授業を振り返ったり成果を明らかにしたりしない。教員一人一人が、授業を振り返り、自分の授業力向上を自覚するためには、重要な研修である。

(4) 平成 30 年度職員アンケートから

① 参画型校内研修の有効性

参画型校内研修が有意義な研修であったかどうかを以下の項目でアンケート調査した。

「校内研修は授業力向上に役立ちましたか。」

- ・役に立った (88.4%)
- ・まあまあ役に立った (11.6%)

この結果から、本研修スタイルを実践した教員全員が、授業力向上に参画型校内研修が有効であると感じていることが分かる。

自由記述による調査も実施した。数多くの改善意見が出される中、最も多かった意見は「授業で多少の変更があってもよい」であった。本来、全員が同じ指導案で授業をする意図は、当事者意識を高めてほしいからである。指導案の修正を許容すると、公開授業の練習授業になってしまう心配があったため「修正なし」にしているのである。その心配がなく、自分の授業をよりよいものするためであれば修正も可能である。

その他、1 名だけだったが、「JG 構想会で検討しても、その後、起案で大幅に変更されるなら上の人であらかじめ話し合ってもらいたい」という意見があった。起案することで、JG 構想会で決まったことに指導が加えられて大幅に変更になることが多かったためである。JG 構想会のレベルを上げて、起案しても大幅に変更されないような授業を構想できるようにするべきである。

4 参画型校内研修の改善

令和元年度(本研究2年目)は、平成30年度の課題を改善するために以下の3つの改善策を実施した。

- ・ J G構想会のガイドラインの作成

J G構想会を学年で運営できるようにすることで協働性・同僚性をさらに高め、高いレベルで授業構想ができるようにするために基本方針や進め方を示す。

- ・ 指導案の若干修正の許容

大枠を変えず、よりよい授業を目指しての修正であればよいこととする。

- ・ メンター制度の導入

公開授業者が授業構想をする際の手助けや相談相手としてメンターを付ける。

- (1) J G構想会のガイドラインの作成

すべての学年で、進行役から参加者に対して「自分の学級でもできそうですか」、「自分が授業をするとしたらどうですか」といった言葉が自然と出た。このような言葉が出たのは、J G構想会のガイドラインに「公開授業学級以外の担任は、自分の学級の実態も照らし合わせながら話し合いに参加する」と書かれていたからである。参加者は、自学級や自分のことを聞かれるためJ G構想会での話し合いに当事者意識をもって参加することができた。そのため、今まで発言することのなかった教員でも発言することができた。

また、1学年の特別活動のJ G構想会では、公開授業者が授業構想で困っていることを参加者全員で話し合っ解決しようとする姿が見られた。このような姿が見られた要因は、J G構想会のガイドラインに「否定ではなく、アイデアを出し合うことでよりよい授業をみんなで楽しくつくる。」と書かれていたからである。参画型校内研修が導入される以前の指導案検討会では、公開授業者がある程度の構想を完成することができないときは検討会をやめて日を改めたこともあった。しかし、J G構想会は、参加者全員で作上げるのだから、公開授業者が困っていることを参加者で話し合うことができる。

- (2) 指導案の若干修正の許容

6学年の算数では、公開授業の協議会で問題になった授業前半の作業の時間配分や見通しのもとせ方について、協議会で出された代案や指導者の話を生かし、次の授業者がその部分を修正して授業を行った。その結果、公開授業の問題点が解決できた。その授業者は、公開授業のためでなく、授業をよりよくするための修正をしたことで授業

の質を高めることができた。この事例からも、指導案の若干修正の許容がよりよい方向に機能したといえる。

また、授業後の聴き取りから「時間配分を少し変えるだけで授業の流れが大きく変わった」「他の学級の3人とも同じ指導案で授業をしているが、教師の介入が多かった分、上手に流れていたが学級会っぽくなかった」といった、指導案には表れない授業対応力の重要さに気付く教員が多く見られた。

- (3) メンター制度の導入

メンターには、J G構想会の合間に公開授業者の相談にのってほしいと伝えた。

公開授業が終わった後に公開授業者にメンター制度について聴き取り調査をした。その結果、公開授業者全員から「心強かった」「とても助かった」「来年も続けてほしい」といった肯定的な意見が多数出された。

5学年の公開授業者は、「メンターがその教科の専門なので様々なアイデアや教科特有の情報を教えてもらうことができた。」「J G構想会で自分がうまく伝えられないことを専門の立場から代弁してもらうことができた」と述べている。

また、3学年の公開授業者は、「J G構想会では自分の考えや方向性に自信をもつことができ、堂々と自分の考えを主張できた」、「専門の人が自分のメンターである安心感は大きい」と述べている。これらのことから、メンターは、専門的な知識で公開授業者の授業構想を支えていたといえる。特に、自分が専門としていない教科を授業する場合は、大きな心の支えになっていた。

1学年の特別活動の公開授業者は、「メンターが特別活動の専門でなかったが、かえってその状況がJ G構想会でみんながアイデアを出し合うことにつながった」と述べている。このことから、メンターは、必ずしも公開授業の教科の専門の教員でなければいけないわけではないということがうかがえる。教科の専門性が高い教員が少ない学校でもメンター制度は十分活用できるということである。

5 参画型校内研修の成果

- (1) アンケートによる授業力向上

教員全員にアンケートを実施した。「校内研修を通して授業力が向上しましたか」という問いへの回答から、全教員が授業力の向上を自覚していることが分かった。さらに、「どのようなところが向上しましたか」という問いに対しては、「授業や子どもの見方の向上」や「対話のさせ方」など、様々

な記述回答があった。この結果から、校内研修を通して、教員一人一人がそれぞれに自分の授業力のどのようところが向上したのか自覚していることが分かった。

記述内容をカテゴリー別に分けると、2学年は教材開発・理解、3学年は新たな視点や気づき、5学年は単元構想力というようにそれぞれの学年のメンバーがほぼ同じカテゴリーに分類されているということが分かった。JG構想会や学年全員が同じ指導案で授業を行うシステムを通して考えたり議論したりしたことが授業力の向上に大きくつながっているのである。

(2) 個別事例による授業力向上の姿

① 3学年B教諭

【JG構想会】

JG構想会では、ロールプレイの導入について話し合われていた。道徳を専門とする教員が数多くいるため、話し合いは専門的になっていった。B教諭は初任者であり、道徳を専門としてはいないため、なかなか発言ができなかった。あるとき、進行から「Bさんの学級でできそうですか。」と質問された。B教諭は「ロールプレイをしたことがないから自信がありません。」と答えた。すると、道徳が専門ではない教員でもできるようなロールプレイの取り入れ方に話し合いの方向が変わった。

【授業】

公開授業の様子を見ながら自分が行う授業をシミュレーションしていたようだ。

B教諭は、自学級で同じ指導案で授業をしたが、指導案は一切修正しなかった。初めて行うロールプレイを成功させることで精いっぱいだったようである。授業後の聴き取りから、ロールプレイは成功したようである。

【アンケート調査】

「どのようところが向上しましたか」というアンケートでは、「登場人物の気持ちを考えたり台詞を考えたりする際に役割演技を取り入れること」と答えている。

【全体を通して】

B教諭は、ロールプレイを自学級の授業に取り入れるために、自分がロールプレイをすることを想定しながらJG構想会に参加し、自学級の授業を想定しながら公開授業を参観し、実際に自学級でロールプレイを行うことで、ロールプレイをする方法やよさを実感することができた。

② 5学年C教諭

【平成30年度（研究1年目）時の成果】

C教諭は、平成30年度に国語の説明文の公開授業を行っている。その実践を通して、国語の単元づくりの仕方や並行読書の重要性を学んでいる。

【メンターとの話し合い（2年目研究での姿）】

JG構想会の前後には、国語を専門とするメンターの教員と何度も授業について話し合っていた。その話し合いでは、単元のゴールで目指す子どもの姿が表れるためにはどのような単元構成にするとよいかということと、1時間ごとに目指す子どもの姿について話し合われていた。

【授業（2年目研究）】

公開授業は、「感銘を受けた手塚治虫の生き方を本の帯に表す」という内容であった。授業の様子から平成30年度と比べて授業力の高まりは明らかであった。それ以上に素晴らしかったのは、教室に貼られた掲示物や子どもが持っている資料であった。教室の壁面には、単元を通して子どもが学んできた軌跡がびっしりと掲示されていた。また、子どもが持っている資料には、自分が今まで伝記を読んで学んだことがびっしりと書かれていた。これらを見たとき、本時だけでなく単元を通して子どもを育てようと努力してきたことが分かった。

【アンケート調査（2年目研究）】

「どのようところが向上しましたか」というアンケートでは、「単元全体を通して、それぞれの時間につけたい力を明らかにしながら授業をすること」と答えている。単元を通して目指す子どもの姿を具現するために、1時間ごとに目指す子どもの姿を明らかにして毎時間授業を行っていたのである。さらに、「校内研修で学んだことを自分の授業にどのように取り入れていきますか（取り入れていきたいですか）」というアンケートでは、「単元のゴールをはっきりさせて、子どもがその時に必要と感じる学習方法を取り入れていきたい」と答えている。

【2年間の研究全体を通して】

C教諭は、2年間の参画型校内研修を通して、単元を通して目指す子どもの姿を具現するための単元構成と、そのために1時間の授業で目指す子どもの姿を明確にすることの重要性を学ぶことができた。5学年の他の3人の教員も「どのようところが向上しましたか」というアンケートに対して単元のゴールを意識することの重要性を書いていた。5学年は、C教諭だけでなく、全員で授業を構想し、全員が同じ指導案で授業を行い、全員で振り返ることを通して、C教諭と同様の学びを得ることができたといえる。